ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２２９

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第三十三回（最終回）勉強会（通年内容は[年表rev.9](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)参照方）の準備**

**「彼等が信じていたのは基督教の神ではない。日本人は今日まで」　フェレイラは自信をもって断言するように一語一語に力をこめて、はっきり言った。「神の概念はもたなかったし、これからももてないだろう」**

20170323 rev.1 齋藤旬

 [**Inventing the People**](https://www.amazon.com/Inventing-People-Popular-Sovereignty-England/dp/0393306232/ref%3Dsr_1_1?ie=UTF8&qid=1477553338&sr=8-1&keywords=Inventing+the+People)**の半訳作業ファイル（**[**和英混訳**](http://llc.a.la9.jp/WaEi%20KonYaku.htm)**）に今週は進捗なし。**

　**先週の予告通り今週は、話題の映画『沈黙』**遠藤周作原作、スコセッシ監督、の感想を述べる。原作小説は余りにも有名だが、あらすじを映画パンフから拾うと、、、

1640年、江戸時代初期、日本で布教活動をしていたイエズス会の高名なフェレイラ神父が捕えられ、激しいキリシタン弾圧に屈して棄教（信仰を捨てること）した、という手紙がヴァリニャーノ神父の元に届けられる。信じられない弟子のロドリゴ神父とガルペ神父はそれを確かめるため、棄教した日本人キチジローの手引きでマカオから長崎に潜入する。

日本にたどり着いた彼等は、弾圧を逃れた”かくれキリシタン”と呼ばれる日本人、モキチやイチゾウらと出会う。ロドリゴとガルペは潜伏しながら布教活動を行うが、幕府の取り締まりにより、モキチらは、ロドリゴらを匿い最後まで信仰を捨てなかったために処刑されてしまう。しかし、キチジローはあっさりと踏み絵を踏み、裏切って逃げてしまう。

ロドリゴは、ガルペとも離れ離れになり、一人五島列島の山中をさ迷う。疲労と空腹で意識が朦朧とする中、再びキチジローが現れ彼を救う。ロドリゴは川面に映った自分の顔がキリストのそれと重なる。その時、侍達が現れ、ロドリゴは捕らえられる。キチジローの密告であった。

モニカやジュアンら他のかくれキリシタンとともに長崎奉行所に連行され投獄されたロドリゴのもとに、キチジローが赦しを乞いに現れる。キチジローは、自分はキリシタンだと申告し、同じ牢に投獄される。ロドリゴはキチジローをまるでユダのように見るのだった。

キリシタンを厳しく取り締まる井上筑後守と、彼に仕える通辞（通訳）はロドリゴに棄教を迫るが、ロドリゴは頑なに拒否する。

ロドリゴは、沢野忠庵と改名したフェレイラに再会させられる。彼の棄教を激しく非難するロドリゴに対し、フェレイラは先人達がこの国で布教してきたキリスト教の、信じられない事実を語るのだった。

ロドリゴのせいで、棄教してもなお残酷な拷問にあうかくれキリシタン信徒達を目の当たりにしてロドリゴは、神は何故沈黙するかと嘆く。信徒の命を守るのか、信仰を守るのか、最後の選択を迫られる。追い詰められた彼の決断とは･････。

**以下に、フェレイラとロドリゴの「何故棄教？」を巡る激しいやり取りを原作小説から拾う。ロドリゴは「司祭」と、ここでは表記されている。：**

遠藤周作『沈黙』、kindle版位置No.2730/3645 ･･････

「二十年間、私は布教してきた」フェレイラは感情のない声で同じ言葉を繰りかえしつづけた。

「知ったことはただこの国にはお前や私たちの宗教は所詮、根をおろさぬと言うことだけだ」

「根をおろさぬのではありませぬ」司祭は首をふって大声で叫んだ。「根が切りとられたのです」

だがフェレイラは司祭の大声に顔さえあげず眼を伏せたきり、志も感情もない人形のように、「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」

「その苗がのび、葉をひろげた時期もありました」

「伺時？」

はじめてフェレイラは司祭をみつめ、うす笑いをそのこけた頬にうかべた。そのうす笑いはまるで世間知らずの青年でも憐れんでいるようだった。

「あなたがこの国に来られた頃、教会がこの国のいたる所に建てられ、信仰が朝の新鮮な花のように匂い、数多い日本人がヨルダン河に集まるユダヤ人のように争って洗礼をうけた頃です」

「だが日本人がその時信仰したものは基督教の教える神でなかったとすれば･･････」

ゆっくりとフェレイラはその言葉を呟いた。その頬にはまだ、こちらを憐れむような微笑が残っていた。

わけのわからぬ怒りが胸の底からこみあげてくるのを感じ、司祭は思わず拳を握りしめた。理性的になれと必死に自分に言いきかせる。こんな詭弁にだまされてはならぬ。敗北したものは、弁解するためにどんな自己欺瞞でも作りあげていくのだ。

「あなたは、否定してはならぬものまで否定しようとされている」

「そうではない。この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない。彼等の神々だった。それを私たちは長い長い間知らず、日本人が基督教徒になったと思いこんでいた」フェレイラは疲れたように床に腰をおろした。和服の裾がはだけ、棒のように痩せてよごれた素足が見え、「私はお前に弁解したり説得するためにこう言っているのではない。おそらくだれにもこの言葉を信じてもらえまい。お前だけではなく、ゴアや澳門にいる宣教師たち、西欧の教会のすべての司祭たちは信じてはくれまい。だが私は二十年の布教の後に日本人を知った。我々の植えた苗の根は知らぬ間に少しずつ腐っていたことを知った」

「聖フランシスコ・ザビエルは」司祭はたまりかねたように手で相手の言葉を遮った。「日本におられる間、決してそんな考えは持たれなかった」

「あの聖者も」フェレイラはうなずいた。「はじめは少しも気がつかなかった。だが聖ザビエル師が教えられたデウスという言葉も日本人たちは勝手に大日とよぶ信仰に変えていたのだ。陽を拝む日本人にはデウスと大日とはほとんど似た発音だった。あの錯誤にザビエルが気づいた手紙をお前は読んでいなかったのか」

「もしザビエル師に良い通辞がつき添っていたならば、そんなつまらぬ些細な誤解はなかったでしょう」

「そうじゃない。お前には私の話が一向にわかっていないのだ」

フェレイラは始めてこめかみのあたりに神経質ないらだちをみせて言い返した。

「お前には何もわからぬ。澳門やゴアの修道院からこの国の布教を見物している連中には何も理解できぬ。デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして別のものを作りあげはじめたのだ。言葉の混乱がなくなったあとも、この屈折と変化とはひそかに続けられ、お前がさっき口に出した布教がもっとも華やかな時でさえも日本人たちは基督教の神ではなく、彼等が屈折させたものを信じていたのだ」

「我々の神を屈折させ変化させ、そして別のものを･･････」司祭はフェレイラの言葉を噛みしめるように繰りかえした。「それもやはり我々のデウスではありませんか」

「違う。基督教の神は日本人の心情のなかで、いつか神としての実体を失っていった」

「何をあなたは言う」

司祭の大声に、土間で餌を温和しくついばんでいた鶏が羽ばたきをしながら隅に逃げた。

「私の言うことは簡単だ、お前たちはな、布教の表面だけを見て、その質を考えておらぬ。なるほど私の布教した二十年間、言われる通り、上方に九州に中国に仙台に、あまた教会がたち神学校は有馬に安土に作られ、日本人たちは争って信徒となった。我々は四十万の信徒を持ったこともある」

「それをあなたは誇ってもよい筈です」

「誇る？　もし、日本人たちが、私の教えた神を信じていたならな。だが、この国で我々のたてた教会で日本人たちが祈っていたのは基督教の神ではない。私たちには理解できぬ彼等流に屈折された神だった。もしあれを神というなら」　フェレイラはうつむき、何かを思い出すように唇を動かした。「いや、あれは神じゃない。蜘蛛の巣にかかった蝶とそっくりだ。始めはその蝶はたしかに蝶にちがいなかった。だが翌日、それは外見だけは蝶の羽根と胴とをもちながら、実体を失った死骸になっていく。我々の神もこの日本では蜘蛛の巣にひっかかった蝶とそっくりに、外部と形式だけ神らしくみせながら、既に実体のない死骸になってしまった」

「そんな筈はない。馬鹿げた話をもう開きたくない。あなたほどこの日本にはいなかったが、私はこの眼で殉教者たちをはっきり見た」司祭は手で顔を覆うようにして指の間から声を洩らせた。

「彼等がたしかに信仰にもえながら死んでいったのを私はこの眼でみた」

雨のふる海、その海に浮かんだ二本の黒い杭の思い出が司祭の心に痛いほど甦ってきた。片眼の男が真昼の光のなかでどのように殺されたかも彼は忘れることはできなかった。自分に瓜をくれた女が薦（こも）に入れられて海に沈められた状況も記憶にそのままこびりついていた。あのものたちがもし信仰のため死んだのでないとすれば、それは人間にたいする何という冒瀆だろう。フェレイラは虚偽（いつわり）を言っている。

「彼等が信じていたのは基督教の神ではない。日本人は今日まで」　フェレイラは自信をもって断言するように一語一語に力をこめて、はっきり言った。「神の概念はもたなかったし、これからももてないだろう」

その言葉は動かしがたい岩のような重みで司祭の胸にのしかかってきた。それは彼が子供の時、神は存在すると始めて教えられた時のような重力をもっていた。

「日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない。日本人は人間を超えた存在を考える力も持っていない」

「基督教と教会とはすべての国と土地とをこえて真実です。でなければ我々の布教に何の意味があったろう」

「日本人は人間を美化したり拡張したものを神とよぶ。人間と同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない」

「あなたが二十年間、この国でつかんだものはそれだけですか」

「それだけだ」フェレイラは寂しそうにうなずいた。「私にはだから、布教の意味はなくなっていった。たずさえてきた苗はこの日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐っていった。私はながい間、それに気づきもせず知りもしなかった」

　最後のフェレイラの言葉には司祭も疑うことのできぬ苦い諦（あきら）めがこもっていた。夕暮の光はさきほどより力を失い、土間の隅には夕影が少しずつ忍びこみはじめた。可祭は遠くで木魚を叩く単調な音と、仏僧たちの悲しそうな読経の声を聞いた。

「あなたは」司祭はフェレイラにむかってつぶやいた。「もう私の知っているフェレイラ師ではない」

「そう、私はフェレイラではない。沢野忠庵という名を奉行からもらった男だ」フェレイラは眼を伏せて答えた。「名だけではない、死刑にされた男の妻と子供も一緒にもらった」

**やり取りのクライマックスを、スコセッシが読んだ英訳から拾うと：**

‘They did not believe in the Christian God.’ Ferreira spoke clearly and with self-confidence, deliberately emphasizing every word. ‘The Japanese till this day have never had the concept of God; and they never will.’

These words descended on the priest's heart like the weight of a huge, immovable rock and with something of that power that had been there when as a child he first heard about the existence of God.

'The Japanese are not able to think of God completely divorced from man; the Japanese cannot think of an existence that transcends the human.'

'Christianity and the Church are truths that transcend all countries and territories. If not, what meaning is there in our missionary work?'

'The Japanese imagine a beautiful, exalted man -- and this they call God. They call by the name of God something which has the same kind of existence as man. But that is not the Church's God.'

'Is that the only thing you have learnt from your twenty years in this country?'

'Only that.' Ferreira nodded in a lonely way. 'And so the mission lost its meaning for me. The sapling I brought quickly decayed to its roots in this swamp. For a long time I neither knew nor noticed this.'

At the last words of Ferreira the priest was overcome with an uncontrollable sense of bitter resignation. The evening light began to lose its power; the shadows little by little stole over the floor. Far in the distance the priest could hear the monotonous sound of the wooden drum and the voice of the bonzes chanting the sad sutras. 'You,' the priest whispered facing Ferreira, 'you are not the Ferreira I knew.'

'True. I am not Ferreira. I am a man who has received from the magistrate the name of Sawano Chuan,' answered Ferreira lowering his eyes. 'And not only the name. I have received the wife and children of the executed man.'

**･･･もうお分かりだろう。私が感じた不安。**即ちもしフェレイラの言うとおり、日本人は「神の概念はもたなかったし、これからももてないだろう」、これが当たっているならば、私の行っているこの研究は、私だけの「納得」に終始することになる。

それも良しかもしれない。退職しfreedomをexecuteできる私としては、それも良し。

　けれども、このシリーズに長い間つきあって頂いた読者の皆様には、もしかしたら「無駄な時間」を費やして頂いたのかもしれません。申し訳ありません。ゴメンナサイ。

ただ、GW明けには、「独り言ち」を再開します。興味のある方は覗いてみてください。

本当に本当に、ありがとうございました。

2017.03.23　齋藤　旬